

守られてきた伝統

おおよど ぎ おんまつり 大淀の祇園祭

大淀の祇園祭は、『伊勢物語』の主人公在原業平と斎王の物語の舞台にもなった明和町の大淀で行われています。祇園祭は各地にあります。大淀では、旧暦の6月14日に近い土曜日に行われます。大淀の3地区から山車がひきだされ、宵宮の東区の山車を皮切りに当日は三世古、山大淀の山車が区内を練り歩きます。夕刻には2隻をつないだ漁船の上に、三世古の山車を乗せて大淀港に浮かべる海上渡御が行われます。夜には三世古内にある三つの区が毎年輪番で担当する花火大会があり、中でも仕掛花火の点火方法は、長年の間にそれぞれの区の秘伝となっています。

近年、約半世紀ぶりに神輿が再建され、小中学生が中心になって大淀のそれぞれの区を練り歩いています。



祇園祭 (明和町教育委員会提供)

守っていくのは私たち

学習のめあて

大淀の祇園祭は、江戸時代から250年以上受け継がれている伝統行事です。京都の八坂神社、愛知の津島神社の流れをくむものだとされており、氏子の安全と農業・漁業の発展を祈って、毎年旧暦の6月14日に近い土曜日に行われています。

大淀の祇園祭は、3地区の祭が複合したものです。各地区から山車が出て、区内を練り歩き、それぞれに特色をもった行事が行われています。例えば、三世古では、大淀港の満潮時に合わせて、幟や提灯で飾られた「なりひら」、「ゆきひら」と名づけられた2隻の船に山車を乗せる、海上渡御とよばれる儀式が行われます。また、夜には花火大会が催され、打ち上げ花火と仕掛花火が水面を彩ります。

祭で、太鼓や笛、鉦などを担当するのは、地区の若者たちです。連日練習を重ねて祭に臨み、雰囲気の大いに盛り上げます。近年、地域住民が、より一体感をもてるような祭にしようと、半世紀程前に火災で失われていた神輿が再建されました。そして、この神輿を担ぐのは子どもたちです。

時代を超えて、脈々と受け継がれてきたふるさとの伝統や文化。様々な困難を克服しながら、それらを守り続け、育んできた郷土の人々の気持ちを考えてみましょう。そして、自分が暮らす地域を見つめ直してみましょう。

考えてみよう

- 1 大淀の祇園祭とは、どのようなものでしょうか。
- 2 この祭が今日まで引き継がれているのは、人々にどんな思いがあったからでしょうか。
- 3 半世紀ぶりに神輿が再建されたのは、どうしてでしょうか。
- 4 再建された神輿が、子どもたちの手によって担がれている理由を考えてみましょう。
- 5 ふるさとの伝統や文化を守るこの意味や課題について考え、話し合ってみましょう。
- 6 自分たちの地域に伝わる祭の起源を調べてみましょう。また、祭に携わっている人々の願いを聞いてみましょう。

☆ 第1部の「ここが私のふるさと (P120～123)」を活用し、ふるさとと自分のかかわりについて考えてみましょう。



かいじょうとぎょ (明和町提供)
 海上渡御

山車が、「なりひら」「ゆきひら」の2隻の船に乗せられます。

参考 祇園祭とは

祇園祭は、平安時代前期の869(貞観11)年、全国に疫病が流行したため、当時の国の数がちなんだ66本の鉦を立て、旧暦の6月14日に、神輿を京都の神泉苑に入れ、災難が取り除かれるよう祈ったことがその起源だと伝えられています。

祇園祭は、厄よけの祭礼行事であったことなどから、京都以外にも広く伝わりました。今でも全国各地に「祇園祭」という名称をもつ祭が行われており、山車や神輿が町を練り歩くものが多くあります。

大淀の祇園祭は、江戸時代中期に、疫病を払い氏子安全、農業・漁業の発展を祈る民間信仰から始められ、京都の八坂神社、愛知の津島神社の流れをくむものだと言われています。

明和町中央公民館 濱口館長さんの話

大淀地区に伝わる祇園祭は、約260年の歴史を誇っています。祭は、人、地域、伝統など多くの要素が支え合って行われてきました。

近年、大淀に建つ住宅は、旧集落内にとどまらず、周辺地域へと広がってきました。そこで、地域住民が、より一体感をもてるような祭にできないか検討され、神輿が再建されることになりました。以前、祇園祭では山車をひく前に神輿を担いでいたのですが、その神輿は火災で焼失していたのです。

2001(平成13)年に、新しい神輿ができあがりました。そして、この神輿は、大淀だけに限らず、町内の子どもたちによって担がれることになりました。神輿を担ぐことをとおして、祭の楽しさや喜びを感じるとともに、祇園祭以外の地域行事に参加する子どもたちが増えてきています。子どもたちの力が、伝統行事を守り育てていくことを願っています。



子ども神輿 (明和町提供)